生成AIが変革する特許SDI（定期特許監視）の実務

商用特許データベースにおける生成AIの統合が、従来の特許SDI業務（ノイズ処理の負担）をどのように効率・化・高度化し、どのようなリスク管理が必要かを一目で理解させること。

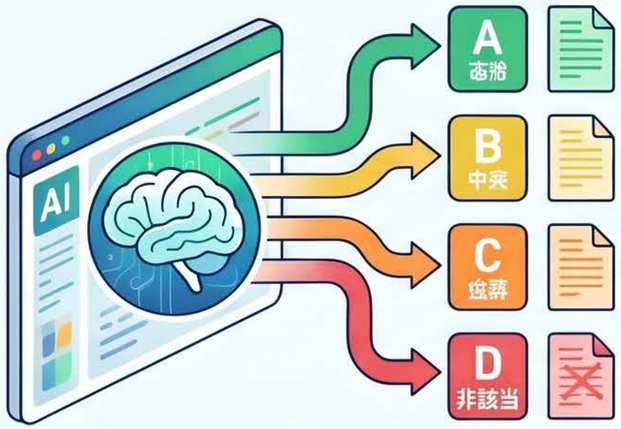
従来課題の解消とプロセスの変革

膨大なノイズ公報



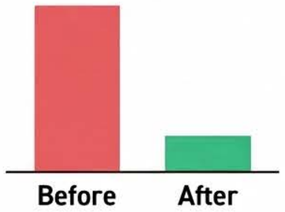
従来8～9割を占めたノイズ公報を、目視査読による膨大なノイズ処理。

膨大なノイズ処理から「根拠付き自動スクリーニング」



AIが必須要件に基づき4段階（A～D）で自動判定。

査読工数を最大
65~90%削減



構造化要約やクレーム対比チャートの自動生成により、精読負担と確認時間を大幅側減。

人間とAIの協働（Human-in-the-Loop）へ移行



AI　一次選別・判定理由　人間（最終確定評価）

AIが判定理由とともに一次選別を行い、人間は最終確定評価に集中する循環構造を確立。

実務上のリスク管理と将来展望

偽陰性（見落とし）リスクに対するガバナンス構築



免費されるAIに対し、除外公報の抜き取り監査（5～10%）などの統制プロトコルが必要。

機密情報漏洩と新規性喪失の防止



未公開情報の再学習を防ぐため、オプトアウト保証や閾域環境での運用が必須条件。

将来像：定常的特許インテリジェンスへの進化



情報配信



AIエージェントが競合動向を自律分析し経営へ直給する体制へ。

Gemini Notebook